

管内和牛繁殖農家における牛白血病のまん延防止対策

東部家畜保健衛生所新城設楽支所 かとう加藤 ちあき千晶、うえまつ植松 ひさし寿志

1. はじめに

地方病性牛白血病（以下牛白血病）は予防薬や治療法がなく、と畜場で摘発された場合枝肉は全部廃棄処分となり、経済的損失が大きい。摘発頭数は年々増加しており、関係者は本病のまん延防止に苦慮している。

新城設楽地域は県内有数の繁殖和牛飼養地域であり、また、県内唯一の和牛子牛市場を持ち、県外からも多くの購買者が訪れる。

平成26年度における管内和牛繁殖農家の牛白血病ウイルス（以下 BLV）抗体陽性率は58.8%（302/514頭）と高い数値を示した。和牛においては特に発症時の経済的損失が大きく、今後陽性率の高い地域の子牛が購買者に敬遠される恐れがあることから、農家により意識の差はあるが、多くが本疾病の清浄化を希望している。

管内の高い農場陽性率を持つ農家において、農家の協力を得てまん延防止対策を実施したところ、陽性率と前回検査陰性牛における陽転率（以下陽転率）の低下が見られたため、当該農場での対策と陽転率の推移を報告する。

2. 農家概要

当該農家は現在2か所の農場を所有している（図1）。

群飼式の第1農場は総飼養頭数75頭。平成24年度の抗体検査で陽転率83.3%と高い数値を示し、過去に4頭の牛白血病発症牛を出している。

つなぎ式の第2農場は総飼養頭数32頭。廃業する酪農家から譲渡され、平成27年4月から利用を開始した。

第1農場	第2農場
<ul style="list-style-type: none"> 飼養形態 : 群飼 	<ul style="list-style-type: none"> 飼養形態 : つなぎ
<ul style="list-style-type: none"> 総飼養頭数 : 75頭 <ul style="list-style-type: none"> 繁殖牛 : 37頭 育成牛 : 23頭 子牛 : 15頭 	<ul style="list-style-type: none"> 総飼養頭数 : 32頭 (全て繁殖牛)
<ul style="list-style-type: none"> 平成24年度の陽転率 83.3% 	<ul style="list-style-type: none"> 平成26年10月に酪農家から譲渡
<ul style="list-style-type: none"> 過去4頭の発症牛 (平成22年2頭、平成25年2頭) 	<ul style="list-style-type: none"> 平成27年4月から牛舎の利用開始

図1 農家概要

3. 対策内容

(1) 吸血昆虫対策

平成26年5月から平成27年11月まで防虫テープと防虫シートの設置を第1農場で実施した(図2・3)。

平成27年5月からは防虫ネットの設置を第1及び第2農場で実施しウイルスの伝播要因となる吸血昆虫の防除を行った(図4)。

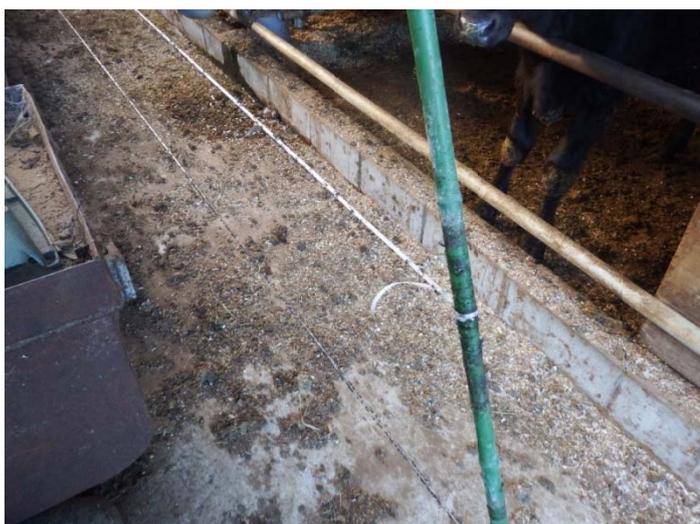


図2 防虫テープ



図3 防虫シート



第1農場
牛舎の上から下まで
覆うように設置

第2農場
牛舎の構造上
地面から約2mまでの設置

図4 防虫ネット

(2)分離飼育

平成27年4月から実施。

前年度抗体陰性牛や新規導入牛の抗体検査を行い、陰性と診断された牛は第1農場、陽性と診断された牛は第2農場に分けて飼育することにした。

抗体陽性牛の産子は分娩発情監視通報システムを利用し、生後速やかに母牛から分離し、第1農場にて人工哺育した。

4. 成果

平成24年度に83.3%だった陽転率は、防虫テープと防虫シートの設置を行った平成26年度には14.3%、防虫ネットの設置と分離飼育を行った平成27年度には8.3%と大きく低下した(図5)。

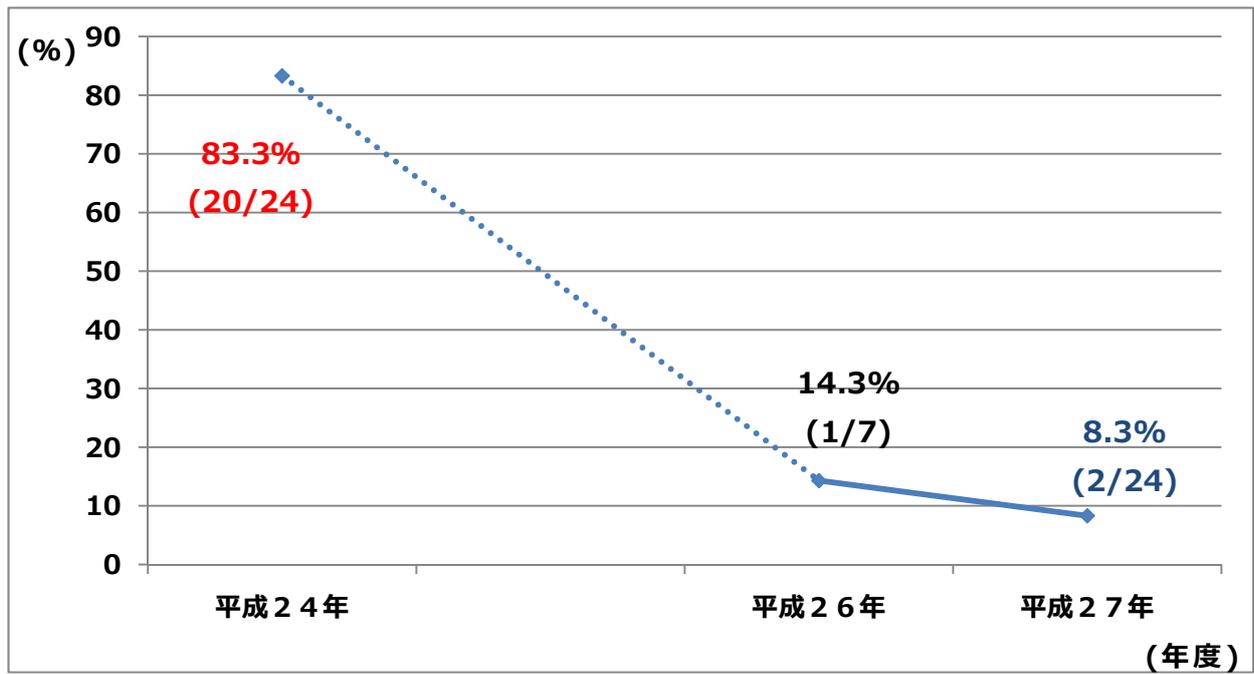


図5 陽転率の推移

※ () 内は陽性頭数/前回検査陰性頭数

5. まとめ

防虫ネットは防虫テープや防虫シートよりも高い防除効果があり、また地面から2メートル程度の高さを覆うだけでも十分な効果が見られた。分離飼育については、陽性牛と陰性牛を二つの農場で分離したこと、陽性母牛から子牛の早期分離を行ったことにより陽転率は低下した。

今後、抗体検査継続による確実な分離飼育、更に陽性牛のウイルス量測定による陽性牛群のリスク順位づけを行うことで更なる清浄化を目指す。また、本農場の対策を参考に異なる飼養形態に応じた対策を検討し、管内の陽性率の低下につなげたい。